

不気味なほどに長い一本道の廊下を走っていた。荒い息使いを響かせながら、四つの影が欠けることなく連なって出口に向かっていているはずなのに不安がぬぐえない。

「本当に、魔王はわたしたちを逃がしてくれるんでしょうか？」

いつもの気丈さとはかけ離れた恐怖に震える声で、異世界から召喚された少女が叫んだ。日頃の紳士的な振る舞いとはほど遠い割れるほどの大声で、先頭を走る王位継承者でもある勇者がさけぶ。

「黙って走れ！」

「わかってるよ、いまは逃げるしかねえんだからな」

「そ、そうね」

大声に急かされて、殿を任されている戦士と、魔法使いのわたしが走り出す。

世界を支配せんともくろむ魔王と、それに対抗する人間達。連合国が送り込んだ勇者パーティー、つまりわたしたちは本拠地の魔王城へ乗り込んだものの、手も足も出ずに敗退し、命からがら逃げ出している最中だった。

ひたすらに床を蹴り上げて走っている最中も、恐怖で歯がカチカチとなる。

赤子と戯れるように聖女と勇者の攻撃を防いでいた魔王から本当に逃げられるんだろうか。逃がしてくれるんだろうか。本当はみんなひたすら駆けながら聖女と同じ不安を抱いているはずだ。

その不安を煽るように、どこからかキーッと甲高い魔物の声が響く。あざ笑うようにも聞こえるそれに、ぶわっと聖女が泣き出してしまった。

「ちよっと、アカリ。立ち止まってはだめよ。怖いのはわかるけれど早く逃げないと」

わたしが彼女の背中をさするけれど、聖女はまったく落ち着かない。

「魔王は別にわたしたちの命を取らなくても、ひとつ確実に心をくじける方法があるじゃありませんか！ わたしはいや！ あんな化け物に汚されるなんて！」

恐怖で錯乱して子どものようにその場に座り込んだ聖女に、先ほどまで恐怖に顔を引きつらせていたサミュエルが表情を取り繕って肩を撫でた。

「そんなことをいうなアカリ。ボクが確実にキミを守るから」

聖女の力は清らかな乙女にのみ与えられるもので、一度純潔を失えば二度とは戻らない。そのため魔王は命を奪わずとも聖女を無理やり手籠めにすればそれでこと足りるのだ。

「守るって！ サミュエル、あなたさつき手も足も出なかったじゃない！」
聖女が声を荒げれば、勇者サミュエルはぐっと押し黙るしかなかった。

「……カトリーヌ、キミたしか変化の呪文が使えたよな。アカリの姿になれないのか」

「え？」

「おい、お前さすがにそれはダメだろ」

戦士リオネルが顔をしかめて勇者に殴りかろうとする。肩をつかんで振りかえらせれば、血の気が引いた青い顔をしていた。

「だがリオネル、ここでアカリが魔王の手の内に落ちれば、我々は新しい聖女を召喚しなくてはなくなる。けれど、もうボクたちにそのリソースはない。わかるだろ、ボクとアカリが特別な仲だからいつてるわけじゃない。これは勇者として、王子としての判断なんだ」

「っ、」

リオネルが振りかざした拳をゆっくりと降ろして、わたしの方へ向き直る。

顔をしかめる戦士と、まったく表情のない顔でわたしを見つめる勇者。二人の影がわたしに落ちる。

「カトリーヌ、キミにしか頼めないんだ」

好きな人がようやくわたしをまっすぐ見つめてくれたと思ったら、こんな頼みをされるときだったなんて。わたしは黙ってうなだれるしかなかった。

ひとたび呪文を唱えれば、わたしの色素の薄い亜麻色の髪はつややかな黒髪に、背は縮み小柄な少女の体型になる。目の前には亜麻色の髪を背中であぐら、長身で手足が長い目つきのきつい女が立っていた。

「完璧じゃないか。これなら魔王の目も欺ける」

心の底から安堵したようなりオネルに胸が締め付けられながら、杖を握りしめる。

「さあ、これで万一追いつかれても大丈夫だ。アカリ、急ごう」

勇者が聖女の背中をさする。その手つきに特別ないたわりを感じて、こんなときなのに鼻の奥がツンと痛くなる。まだ泣いてはダメだ。無事に逃げおおせてからでない。

前を向いて一歩足を踏み出したと同時に、空気が張り詰め全身に鳥肌が立つような悪寒を覚えた。

「あ……」

この気配、この魔力。わたしは、いや、わたしたちは知っている。

「走れ！」

誰かが叫ぶのと同時に、弾けるように駆け出す。いや、駆け出したはずなのに、まるで自分の身体ではないかのように筋肉が動かない。

「あ、なん、で」

反射的に振り返れば、魔王の王勺がわたしの影を床に縫い付けるように刺し

ていた。おもわずサミュエルを見れば一瞬顔色を曇らせたものの、背中を見せて走り去ってしまった。

「あ……」

作戦は成功した。それなのに、どうしてこんなに胸が痛いんだろう。

「女、逃げられると思ったのか？ 悪い子だな」

大きな骨ばった手がわたしの肩を掴む。声を上げる暇もなく、わたしは闇へと引きずり込まれて気を失った。

「う、うう……」

「気が付いたか」

身体の芯が冷えるほど低い声に顔を上げれば、山羊のような角を頭にはやし、漆黒のマントをまとった大柄な男がわたしを見下ろす。まるで人間の血を吸っているような赤い瞳に、冷たい月光のような銀髪。人間離れた美しさの、気味の悪い男だ。

「ま、魔王、ホムート」

「ふふ、我の名をそのかわいいお口でちゃんと呼べるようだな。えらいぞ」

まるで小さな子どもを褒めるような声で頭を撫でられる。ふいに触られてぞくぞくと悪寒がして身をよじろうとするが、カチャカチャという金属音が響くと同時に、身体が引つ張られる感覚がしてうまく動けない。

「あ」

おそるおそる振り返れば、後ろ手に縛られて、腕が滑車につるされた状態で立たされていることに気が付く。これでは身動きができない。

「……拷問でもするつもり？」

問いかければ、魔王は口元を歪めながら聖女へ変化したわたしの髪を撫でくる。その手つきが思いのほか丁寧で、面食らってしまう。

「無粋なことをされたいのか？」

穏やかに問い返されて、わたしはいよいよ訳が分からなくなる。先ほどまで城の天井にまで届きそうな火柱を召喚する呪文を唱えて、わたしたちを全滅させようとして魔王が、なぜ聖女にだけはこんなにも慈悲深いのかわからない。

もしかしてこの魔王も敵ながら聖女に惹かれているんだろうか。胸の奥がもやもやとする。王子でもある勇者の心も、戦士の眼差しも奪って、そのうえ魔王さえ虜にしているなんて。

わたしはずっと前から王子のことを見ていたのに、それなのに身代わりになれと乞われてここにいる。恐怖ではなく別の感情で、目頭が熱くなっていく。でも、ここで時間を稼がなければ、好きな人も恋敵も、この世界も終わってしまうんだ。

「まさかあなた、わたしを手に入れたいの？」

震える声を抑えながら、わざと挑発的に目を見据える。魔王の目線が頭のとっぺんからつま先まで舐めまわすように這っていく。

「ほう、気が付いておったのか？ならば話が早い」

魔王の手が聖女のローブを掴む。幼い顔に似合っているささやかな膨らみをすりすりとお撫でられて、ぞわっと背筋が粟立つ。

「さ、さわらないで……！」

睨みつけるが、魔王は不敵に笑うだけで胸を弄るのを止めない。当然だ。あちらはなにも抵抗できない相手をいたぶって楽しむことが目的なんだから。

「まったく素直ではないな。仕方ない、お前が素直になるまで拷問してやろう」喉奥で笑いながら魔王は聖女のローブを剥いだ。そしてゆっくりとブラウスのボタンを外され、キャミソールのレースがのぞく。

「や、やめ、やめて……！」

「やめて、だと。そのようにかわいらしくさえすれば我が思い直すとても？ほんとくに、お前はかわいいな」

長く骨ばった指が下着の裾にかかり、そのままくり上げられる。あつという間に胸が露出させられて、冷たい空気が乳首を震わせる。

「ほう、これはずいぶんかわいらしいな」

肌と胸の飾りの間にある薄い皮膚を、円を描くように撫でられてたじろいでしまう。ケダモノのように、前戯もなく性急に乱暴されると思っていたのに、残忍な魔族でも、気に入った女の子には乱暴なことはしたくないんだろうか。

すりすり、すりすり♡

焦らすように乳首の周りだけ撫でられる。貴族令嬢として身持ちは固くなければいけないかったから、男の人に、こんな風に触られるのなんて初めだ。望んでないはずなのに、先端が固くしこっていく。

「あっ♡」

鼻にかかった声が漏れて慌てて唇を噛むが、魔王は嬉しそうに目元を緩ませた。

「気持ちがいいのか？」

ちがう、と反発したいのに口を開けば変な声が出てしまうかもしれない。懸命に唇を引き結べば、魔王はつまらんと呟いてから突然胸の尖りを指ではじいた。

「ふうっ♡」

「は、悩ましい声を出しおって、きもちがいいのならもつと弄ってやるぞ♡」
頭をもたげた乳首を太い指がきゅうっ♡と摘まみ上げた。突然の強い刺激に身体が跳ねて、繋がれた鎖が引っ張られてカチャカチャと金属の擦れる音が響く。

「っ♡、ふうっ♡んぐっ♡」

「は、男を知らぬのにずいぶんと敏感ではないか。もしか、自分で慰めておったのか？」

「っ！ ち、ちがっ」

魔王の指摘に思わず顔が熱くなる。王子が聖女にわたしには向けることのな
い優しい笑顔を向けるたびに、与えられない愛情に苦しんで愛される妄想をし
ながら自分を慰めていたからだ。

「ほう、私の予想は当たっていたようだな。他の男を想いながらいやらしい遊
びに耽って負ったのだろうか？正直おもしろくはないが、私は寛大だからな。許
そう」

魔王が乳頭に、軽く爪を立てる。そしてそのまま乳首をカリカリ♡と引っか
き始めた。

「乳首がすきなのか？自分で弄るよりも悦いだろう？そら、素直に声を出せ」

「っ、だが、あんたなんか……！」

「まったく、気の強い女だな。よいよい、私の強い女、私は嫌いではないぞ。だ
が、記念すべき初夜くらいはもっとしとやかになれ」

魔王が何やら囁きながらおなかを撫でる。その瞬間、ずくと全身の血が煮えたぎるように熱くなったと思うと、おなかの奥が重くなる。

「え？ あ？ な、なに？」

「淫紋だ。これをつけて精を注がればもうお前は我とまぐわうことしか考えられなくなり、たちまち私の肉人形の花嫁になってしまふのだ♡」

「ひ、卑怯者……！」

「卑怯者とは心外だな。魔王城に乗り込むのを待つまでもなく、のんきに街の宿屋で休息をとっているお前をさらって手籠めにしてやってもよかったのだ。それをわざわざ、我に敗北するまで待つてやったというのに」

まるでお気にいりのおもちゃで遊ぶみたいに、魔王の長い指がきゅっ♡きゅっ♡と固くしこった乳首を擦り合わせながら引っ張る。そのたびに淫紋がチカチカと輝いて、おなかがキュンキュン♡と疼き始めた。

「あ♡や♡だめ♡」

さっきまでと全然違う♡胸の飾りに刺激を与えられるたびにおマンコが震えて、こぷりと蜜が染み出してくる♡

「ん？ さきほどまでの勢いはどうした？ まるで望んで我の手に堕ちたいように見えるぞ」

魔王の指がぴんっ♡ぴんっ♡と乳首を弾く。それだけで太ももが震えて、甘い痺れが全身に駆け巡って、腰が抜けてしまいそうになるほどきもちいい♡

「や、やめっ♡あっ♡あっ♡堕ちる、もんですか、みんなが助けに来てくれるまで、ぜったいに」

自分の声が媚びたように高くなっているのに気づかないふりをしながら、魔王を睨みつける。

「ほう？ 仲間たちを信じておると。この状況でも心が折れぬとはますます我

の花嫁にふさわしい」

大きな手のひらがわたしの顔を包み込む。頬をやさしく撫でられて見つめられて、身体が強張った。

「よし、決めた。お前が自ら望んで我の花嫁になりたいと媚びれば仲間は見逃してやろう。どうだ？」

「な、んですって……」

魔王の提案に、一瞬たじろってしまふ。けれどもこいつが約束を守るはずもないとすぐに思い直した。

「魔王が約束を守るわけないでしょう。信じられないわ」

「ふ、心外だな。我は慈悲深いのだぞ。しかし、あくまで我の手をはねつけるか。よいよい、では気が変わるまで我と戯れようか」

魔王が手をかざせば、何もない空間から細く短い杖が現れる。先端にいくに

したがって細くなっているそれは、先端に丸い玉のようなものが付いていて、何に使うものかわからない。

「そ、それで、わたしに妙なことをするつもり？」

「おや、冒険していてもやはり箱入り娘だな。これが何に使われているものかもわかぬか」

杖の中央にはめ込まれた石を押せば、途端に杖の先についた玉がブルブルと震えだす。それを乳房にあてがわれて、わたしはようやくそれが何に使われるものか悟って悲鳴を上げた。

「あっ！？ や、やめっ！」

「ほう、ようやくわかったのか？ これはな、お前の乳首をいじめるための玩具だ。お前のいやらしい乳首をブルブルと震えさせて、気持ちよくさせるためのものだ。お前は才能がありそうだからきつと乳首だけでイッてしまうだろうな

♡

ブルブル♡ぶるぶる♡ぶるぶる♡ぶるぶる♡

魔王が杖を動かせば、丸い玉の部分がわたしのツンと尖った乳首が震えさせる。

「やっ♡あっ♡だめっ♡ぶるぶる、しないでえっ♡」

「おや、かわいらしい声が出ているではないか。そら、もっと聞かせろ♡」

魔王が杖をさらに強く押しつける。すると玉の振動が強くなって、乳首に食い込む。胸がビリビリ♡と痺れて、頭のとっぺんからつま先まで駆け巡る。無意識に身をよじって、鎖を引っ張るけれど、もちろん手かせは外れない。

「や、やめっ♡ふぐっ♡んん♡」

チカチカ♡と刻まれた忌々しい紋章が乳首の気持ちいいのと呼応するように光る。乳首だけに刺激を与えられているはずなのに、おなかが熱い♡頭もだん

だん、ぼーっとして、難しいことが考えられなくなる。

あ、これダメなやつだ♡

「あ♡んん♡あ♡あ♡」

ピンっ♡と足の筋肉が突っ張っていく。身体がイク準備はじめてる♡いくら淫紋を刻まれてるとはいえ、ついさっき殺された相手なのに、信じられない。強制的に乳首で気持ちよくされておマンコキュンキュンしてる♡

「おや、イキそうなのか？さきほどまでの威勢はどうしたのだ」

「う、うるさっ、んおおっ♡♡」

乳首に杖の先端をぎゅう♡と押し込まれて、腰が大きく跳ねる。ビクン、ビクンと数度身体が大きくはねると同時に、頭が真っ白になった。

「あ……、うそ、いまのは、ちがっ」

イってしまった。いくら淫紋を刻まれていたとはいえ、憎い相手に乳首をい

じめられただけでイってしまった。それだけでも屈辱なのに、赤く腫れた乳首がまだジンジンと疼いて、身体の熱がまだ引いていない。

「イって緊張の糸が切れてしまったのか？　ずいぶんかわいらしい姿になったな」

「えっ」

なんのことかわからずに魔王を見つめていると、胸に垂れている髪の色が亜麻色に戻っている。変化の術が解けてしまっている。聖女のふりをしていたのがバレてしまったのだ。さきほどまで高められた身体が急激に冷えていく。

「……残念だったわね。わたしは聖女じゃないわ。ホンモノの聖女たちは今頃魔王城の外まで逃げおおせているでしょうよ」

聖女を捕まえたはずが、その正体はしがない魔法使いの令嬢だと露見したのだ。魔王は必ずたばかられたと激怒するだろう。ひと思いに殺してくれるなら

まだいい方で、異形のモンスターの慰み者にされるかもしれない。

押し黙ったままわたしの姿を見つめる魔王は、何を考えているのかわからない。これからわたしに施す拷問でも考えているのだろうか。

誰も来てくれないとわかっていても、情けなく叫び出したい。そんな衝動を抑えながら、懸命に魔王に反抗すれば、ふっと魔王の口元が緩む。

「知っておるぞ、カトリーヌ」

魔王は驚くほど穏やかな声でわたしの名前を呼んだ。

「なんで、なまえ……」

「もしや、あのような変化の術で我をたばかったつもりだったのか。本当に愛いやつだな、お前は」

血のように赤い瞳がゆっくりと近づいてくる。吸い寄せられるようにそれを見つめていると、鋭い牙がつぶつと唇の薄い皮膚を裂いた。わずかな痛み在眉

を嚙めれば、ぬるりとしたものが這う。びっくりして思わず口を開ければ、その隙を見逃さずに湿ったものが入り込んできた。

「ん？！ ぶう♡」

長い舌がわたしのそれに絡みつき、にゅちゅにゅちゅ♡と表面を擦り合わせられる。魔王の熱い唾液がじわじわと柔らかい肉へ染みわたり、恐怖が混乱にすり替わっていく。

「は、そのように怯えるな。我はお前にはひどいことはせん。気に入っておるからな。ただし、抵抗すれば気が変わってしまうかもしれないがなあ」

上顎を大きな舌で撫でられて、思わず魔王の唾液を飲み込んでしまう。なんとも思っていない相手の体液が身体の内側へ入っていく感覚に泣きたくなる。こんなキス、誰ともしたことがないのに、拒絶しなきゃいけないのに、どうして身体が熱くなるの♡

口づけされながら胸に手を這わされる。変化が解けたから、聖女のつましやかな胸ではなく、わたし自身の大きすぎてコンプレックスな胸。魔王がぐにと揉みしだいて形を変えていく。舌を擦り合わせられながら、白い双丘を揉みしだかれると、おなかに刻まれた紋がチカチカと光って子宮が疼いてしまう。

「や、やめ」

歯の形を確かめるように舐められて、理性がかすむ。ごりゅっ♡と固いものをスカート越しに押し当てられて、どぷっ♡と愛液が流れ出た。
ダメ。このままじゃ、受け入れてしまう。

甘く痺れる身体を叱咤するように拳を握り、好き勝手に這いまわる舌を思い切り噛んでやる。わたしを腕の中に収めて笑っていた魔王の身体がわずかに震え、舌が逃げていった。

「は、はは、わたしのことを敵に易々と身体を開くような女だと思って、侮辱するからこうなるのよ」

わたしの歯型がついた舌は、あつという間に傷が塞がっていつてしまった。それでも、屈しないという意思表示ができたことに安堵する。大丈夫、わたしはまだ堕ちていないし、魔王の花嫁なんかにならない。

「そうか、頑張るな。仕方あるまい、お前が望むならば茶番にも付き合ってやらねばなあ？」

スカートをたくし上げて、下着越しに敏感な部分を撫で上げられる。くちゅり、と水音が響いて、歯を食いしばる。そのまま下着越しに肉芽をとんとんと刺激されて、太ももに力が入った。

「あっ♡や、やめっ♡ああ♡」